

腸管出血性大腸菌感染症とは

1 類型

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により 3 類感染症に位置づけられる感染症で、診断した医師は直ちに最寄の保健所に届け出なければなりません。

2 発生状況

高頻度に分離される血清型には 0157、026、0111 などがありますが、その他の血清型を含めると 50 種以上が分離されています。報告される患者数は全国で毎年約 3,000 人～4,000 人に及びます。

3 感染経路

牛生肉（レバー等を含む。）からの感染が多いですが、その他にも飲料水や野菜、水泳による感染、保菌者からの二次感染など様々な経路が報告されています。乳幼児や高齢者は特に感染しやすいので注意が必要です。

4 症状

下痢（水様下痢から粘血便、鮮血に近い便まで見られる。）、腹痛、吐き気や発熱を伴うこともあります。重症例では発症後、患者の約 10%が溶血性尿毒症症候群（HUS）を合併することがあります。HUS は乳幼児や高齢者によくみられ、死に至る場合があります。

5 潜伏期

2～14 日（平均 3～5 日）

6 予防方法

(1) 生肉は食べない

生肉（特に内臓）には様々な菌やウイルス（腸管出血性大腸菌や肝炎ウイルスなど）が付着している可能性があります。そのため、生肉は十分に加熱して食べる必要があります。

(2) 食品に触れる際は手洗いを

調理前や食事前、用便後には、石けんで手をよく洗いましょう。

(3) 汚染された衣類等は十分に消毒しましょう

腸管出血性大腸菌は少数の菌で発症するため、二次感染をおこしやすい感染症です。患者や保菌者の便から経口感染するので、便で汚染された衣類、寝具、おむつ等は消毒剤で十分に消毒する必要があります。特に感染しやすい乳幼児や高齢者がいる家庭・施設では特に重要です。